尋ね人ってわけじゃないんだけどね…。 Relax 2000 12

滝本 誠

獣道家

尋ね原稿／20年ほど前、ライナーノーツを13本ほど書き、渋谷陽一氏とも対談した記憶があるが、みんなアルツの闇のなか、誰か発見された方お知らせください。

『スーツの神話』中野香織（文春新書）

スーツをほとんど着たことのない小生は当然のごとく社会から認知を受けない存在となる。スーツは社会なのだ。中野さんのこの本は見事に、スーツが社会的専横にいたる歴史、哲学を楽しく解き明かしてゆく。しかし、良く読むと中野さん、かなり変な人である。リスペクト。

『テルミン』竹内正実（岳陽舎）

このまえ、友人の結婚パーティで、作家の中原昌也と抱き合ったのだが、わかったのは彼の持ちモノが小さいということではなくテルミンを所有しているという事実だった。ただし、演奏することはとても難しいとのこと。謎の楽器、謎の発明人物テルミンがなぜかここにきて浮上。

『画家たちのアメリカ』津神久三（新潮社）

津神さんは、わが少年時代のアイドルだった。『ボーイズ・ライフ』という少年雑誌でイラストを描いていらっしゃったが、惹かれたのは“津神”という名前のインパクトだった。津神憤太郎なるペンネームで短歌を詠むにいたったのもそのためである。以来37年、彼はタフだ。

『バッド・チリ』ジョー・R.ランズデール（角川文庫）

デイヴィッド・リンチがおさえたこのシリーズの映画化権だがいやいやとんでもなく、下ネタ寄りの快感フレーズ満載の傑作シリーズである。いうまでもなく成功の原因はストレートの白人とゲイの黒人コンビの対照がそれだけでドラマと笑いを生むことにある。おれと担当Yのように。

『カラヴァッジョ　灼熱の生涯』デズモンド・スアード（白水社）

カラヴァッジョだけはすごかった。ミケランジェロの絵なんてひどいものだ。ダ・ヴィンチはまあまあ、か。ルネサンスを過大評価したのは誰だ？　アート史の陰謀はどこで始まったのか？　そんな疑問も湧いたが、映画のアウトサイドにアメリカン・ノワール完成までは口を噤もう。